



大転換の時代を 迎えて

行学道場担当委員長

森下恵王

「コロナ禍」となった令和2年も残りの僅かとなっている。未曾有の危機は、人と人を分断した。

仏教哲学者のジョアンナ・メイシーは、

今、我々が選択すべき「3つのストーリー」を挙げています。

1つ目は、特に生き方を変えず、成長・拡大を旨として、ただ進めばよかった

「これまで通の」ストーリー。その「大転換」のストーリーに「つ

2つ目は、経済衰退・資源枯渇・気候変動・災害・戦争などにより、これまで通りが「大崩壊」するストーリー。

3つ目は、「これまで通り」や「大崩壊」に代わる、社会公正の実現、持続型社会への移行を目指す「大転換」のストーリーである。

ジョアンナは今この「大転換」のストーリーに「つ

我々は仏教を基に何を残すべきか

なかりをもつて「力を注ぐべきことを述べている。

日蓮聖人は文應元年（1260）、鎌倉幕府に『立正安国論』を奏上された。

それは、正嘉の大地震を皮切りとした、天変地異、疫病、飢饉などの災害に見舞われ、まさに未曾有の危機に晒されていた当時の日本に、正法を立て大転換をはかる日蓮聖人のご覚悟だったのである。

今、我々も、この「大転換」となるストーリーを問い直す時がきているのではないか。

単に寺院の存続などではなく、仏教は百年後、千年後、もっと先に何を残せるか、何を残すべきか。我々はこれに値する日蓮宗としての

ストーリーを打ち立てるべき、大転換の時代を迎えている。今期の行学道場は、これまでの開催で紡がれた思いを受けつつ、コロナ禍を逆手に取った新たな試みとして、オンラインを会場とした学びの場を多数開催している。

地理的・時間的・経済的制約を超えて学び合い、コロナ禍により分断された我々が「新しいつながり」によって、新たな異体同心をもって歩みを進め、大転換の時代に即応できる地盤づくりの一助となればと願い、今後の行学道場の発展に努めたい。

◇森下恵王II行学道場担当委員長。現代宗教研究所研究員。

宮崎県立正寺副住職。昭和62年生まれ。